

伝える知識と伝わる情報

遠藤 眞美

Knowledge and Information

Mami Endoh

『Oral health の health とは何か』。1年以上前の深井保健科学研究所で行われている疫学セミナーで質問したことがある。その際、『“stomach health” や “eye health” は無いね』と会話になった。口腔衛生や口腔保健という意味の oral health であるが、中学校の時に習った “health=健康” の意味が私にはどうもひっかかる。mental 以外の他の体の名称に health がついて表現されることは何故、ないのか？私が常日頃考えている疑問である。health の捉え方は様々であるが、いつから自分が興味を示したのか考えてみた。歯学部4年生の時、『歯科医師として患者さんが健康になることをお手伝いできるのか』とお会いする先生方に聞いて回ったことがある。今では恐ろしい質問をしたと思い出しただけで身震いする。高校生の時、患者さんが最後まで食べたいものが食べられること、ずっと笑っていられるように何かをしたいと歯科医師を目指した私は、学年が上がり勉強するごとに“歯医者は病気の治し屋”なのかと不安だった。4年生になって口腔衛生学の講義が始

まり、初めて健康というキーワードと出会うことができ、その後、先の質問を先輩たちに繰り返していたのだと今、自分なりに分析する。それから10年以上経過し、自分が教員として逆に聞かれる立場になった。必ず正解という答えがあるものではないので難しい。しかし、診療室での歯科治療場面、障害児・者施設や高齢者施設での食事に関する支援、国際歯科保健活動を通して oral health は患者だけでなく住民も必要としていること、oral health は全身の健康に大きな影響をもたらすことを実感している。これらの活動において、歯科医療者だけで行なうよりも多くの専門職種が手を取り合って支援を行なうことで多くの住民が健康になることができるということを知ることができた。

先日、住民を対象とした口腔ケアに関するシンポジウムに参加した。多くの住民が来場している現場に立って、以前ならば“歯科”と聞くと倦厭されがちだった領域が“口腔ケア”という題名にひかれて住民がシンポジウムを聞きに来る時代になったのだ。歯科医療が生活に近づいてきたのだと実感した。このシンポジウムは医師、歯科医師、理学療法士など様々な職種の演者がそれぞれの観点から“口腔ケア”について語るプログラムになっていた。しかし、そのシンポジウムでは生命の問題や危機を冒頭に出し、それら全ての病気が口の中から発生するという恐怖を並べたもので聴講者の人たちは質問内容からも不安を感じてい

【著者連絡先】

〒803-8580 福岡県北九州市小倉北区真鶴 2-6-1
九州歯科大学学生体機能制御学講座摂食機能
リハビリテーション学分野
遠藤眞美
TEL&FAX : 093-285-3074
E-mail : r09endo@fa.kyu-dent.ac.jp

るようだった。近年、口腔ケアという言葉は一般住民の身近な言葉になってきたといえる¹⁾。その身近さから住民は歯や口に対して“むし歯”、“歯周病”という疾病だけでなく“美味しい食事”、“素敵なお見た目”など社会生活における満足や健康的な生活にかかせないものとイメージするようになってきているように考える。

上述したシンポジウムは多くの住民に対する健康教育を目的としていたはずである。しかし、住民に対して不安を一方向的に与える内容を繰り返し提示していたこのシンポジウムは本来の健康教育の効果を発揮することができたのであろうか。

私たち医療者はいつも患者とのコミュニケーションで苦労している。専門家ではない住民が正しい知識を学習し理想的な行動を行うのは容易ではない。これは情報を提供する専門職の私たちにとっても重要な課題といえる。科学的根拠に基づいて恐怖を並べることが良いコミュニケーションでないことはわかっているが、気付かずに誤った情報提供をしている可能性は否定できない。例えばテレビや雑誌でごくまれな口腔内疾患が取り上げられると、翌日、多くの住民が胸に強い不安や恐怖を、手に鏡を持って来院する。インターネットやメールマガジンで一方向的に発信された情報に一喜一憂して健康な方が一瞬で患者として来院する。専門家である私たちの一言が住民の人生を変えることもある。このように健康に不安を感じている住民にとって私たちが提示する情報は武器になり得る。

歯科医療はう蝕、歯周病などの疾病中心から機能を含めた症状の改善に対する治療、口腔ケア、加えて健康維持や機能向上など予防学、oral health も含むようになっている。加えて在宅医療の必要性から歯科医師、歯科衛生士は医療の現場から生活の場に深く関わり始めている。こ

のように現在、oral health の考え方を軸に歯科医療者が関わる対象は疾病がある外来患者だけでなく健康支援を必要とする一般住民へ、実施場所も診療所・病院から地域へと広がっている。公衆衛生学の概念は以前より重要視されていたが、多くは専門家だけで語られたり自分の仕事として捉えていなかった歯科医療従事者が多かったり、現在のように医療者が地域の対象者に直接的に関わる機会は少なかったのではないかと推察する。地域での活動は、他の職種とも関わる機会も多くなる。oral health の目的や対象者は時代や場所、住民の状態によって変化しうものではないかと思う。地域での oral health の実施には対象者を含めその方に関わる職種に対してどの情報を伝えていくか、どのように情報を共有していくかなどが命運を握るのではないかと思う。私の学生時代、“科学的根拠”、“EBM”という単語を繰り返し言われてきた。しかし、“正しい情報”、“情報の選択”、“コミュニケーション”、“教育”とは何かを学生として考えたことがあっただろうか。今になれば講義での症例提示や臨床実習の場で、考えるたくさんのチャンスももらっていた。私たちが卒業した時代よりも今の歯学部教育カリキュラムは忙しく、知識や実際の技術を覚えることに学生たちは時間を割いているように思う。また、大学院生と話しをしていると、研究のための研究になっているのではと思うこともある。そこで、大学での学生や大学院生に、科学的根拠、情報の大切さ、それらを共有する際のコミュニケーションの重要性などについて多くを感じ考えてもらえるよう努力をしながら切磋琢磨していきたい。

文 献

- 1) 遠藤真美：口腔ケア，歯界展望，948-949，2010.